

第3回 福山市学校教育環境検討委員会 次第

日時 2025年（令和7年）6月5日（木）

18時30分から

場所 福山市役所 本庁舎3階 大会議室

1 教育長あいさつ

2 報告・説明

第2回検討委員会の概要及び補足説明

3 諮問事項についての協議

○これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方について

○新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について

4 その他

○次回（第4回）学校教育環境検討委員会

【日時】2025年（令和7年）7月7日（月） 18：30～

【場所】福山市役所本庁舎 3階 大会議室

(白紙)

第2回検討委員会の概要

第2回 福山市学校教育環境検討委員会 概要

【日時】 2025年（令和7年）4月30日（水） 18:30～20:30

【場所】 市役所本庁舎3階 中会議室

【出席】 委員19人（全員出席）

◎委員長、○副委員長

◎伊澤 幸洋	福山市立大学教育学部教授	橋本 秀基	福山市公立小学校長会会長
森 美智代	福山市立大学教育学部教授	新谷 陽子	福山市公立中学校長会
○佐々木 伸子	安田女子大学理工学部 建築学科教授	土利川 佳保	福山市保育施設保護者会 連合会会長
山岡 英樹	福山市自治会連合会副会長	小鼓 悠	福山市私立幼稚園PTA連合会
久保 辰己	福山市自治会連合会常任理事	菅田 雅夫	福山商工会議所副会頭
高杉 清志	福山市連合民生・児童委員 協議会副会長	金山 節津	市民公募
佐藤 正	福山市交流館長会幹事	亀山 マリエ	市民公募
野田 寿雄	福山市PTA連合会会長	佐藤 有香	市民公募
三木 智恵	福山市PTA連合会幹事	花谷 忠厚	市民公募
阿部 勉	福山市PTA連合会常任理事		

【概要】

- 1 教育長あいさつ
- 2 福山市学校教育環境検討委員会委員・事務局紹介（異動者）
- 3 報告・説明
第1回検討委員会の概要及び補足説明
- 4 諮問事項についての協議
これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方について
- 5 その他

委員から出された主な意見

■学校再編の在り方について

- ・学校再編の在り方として、義務教育学校の整備が大きなテーマと考える。
- ・義務教育学校の良さと課題について理解できたが、義務教育学校に勤務する教員の意見や考えを聞いてみたい。
- ・小中一貫教育を同じ校舎の中で実践する義務教育学校では、前期課程（小学校段階に相当）の教員は、後期課程（中学校段階に相当）の教員から専門的な指導法を学ぶことができる。また、後期課程の教員は、前期課程のときのこどもの実態を踏まえた、個に応じた指導・支援ができる。後期課程の教員が専科で前期課程の授業を担当することもメリットがある。
- ・小学校から中学校への進級時には、こども一人一人の状況について情報を共有するなど、教員間で連携をしているが、義務教育学校は、職員室が1つで、教員間の情報共有や連携した対応を日常的に行うことができる。こどもにとっても、多様な教員に出会うことができる。
- ・他市の義務教育学校で、居心地の良い集団に変わっていくための研修の在り方などについて、前期課程の教員と研究しているが、前期課程の教員は学級集団づくりや授業づくりのレベルが高く、後期課程の教員は学ぶことが多いのではないかと思う。
- ・小学校は学級担任制で、教員は担当学級のこどもたちに常時接しており、個に応じた声かけなど、

第2回検討委員会の概要

こども理解が基盤にある。中学校の教員は、担当教科の専門性が高い。どの中学校区においても小中一貫教育を通して、教員は互いの良いところを学び合い、切磋琢磨し合っている。そのような中、小学校と中学校の両方の教員が一緒にいる義務教育学校は、こども一人一人を多様な教員が見て関わり、相談しながら授業づくりもできるため、より効果があると思う。理想的な教職員集団と言える。

- ・一方で、小・中学校が別であれば、中学校入学で環境が変わり、気持ちをリセットできるという良さがある。
- ・義務教育学校同士の研修やそれぞれの学校の取組の情報発信・普及に加えて、義務教育学校に勤務したことのない教員への研修や教員間の交流もあった方がよい。
- ・義務教育学校に期待が持てるので、予算を含めた条件が整うのであれば、整備を進めていけたら良いと思う。義務教育学校では、過小規模校では得られにくい活動など、こどもたちがより豊かな教育環境の中で学んでいけると思う。
- ・義務教育学校の整備の方向性について、多くの人に納得してもらうためには、義務教育学校でこどもたちにどのような力が付くのか、客観的なデータがあれば説得力が増し、議論が進むと思う。
- ・客観的なデータとして、学力テストの結果は、学校の規模の違いなどから比較が難しい。数字だけを比べることは、本質を見誤るので行わない方がよい。
- ・学校を再編することにより、設備的にも予算を集中できるというメリットがある。想青学園では3Dプリンターなど先進的な機器も導入している。実際に見ると良さがよく分かるので、この委員会で見学会を開いてもいいと思う。
- ・広域からの通学は負担はあると思うが、海外ではスクールバス通学はめずらしいことではない。安全面において、スクールバスでの通学も良いと思う。
- ・多様性の時代だからこそ、義務教育学校、イエナプラン教育校、特認校、中高一貫校、私立学校など、学校の選択肢が多くあることは理想的である。そうした観点も、義務教育学校を増やしていくことと併せて必要である。
- ・中学校区よりさらに大きなエリア（東部、西部、南部、北部、中央部など）で捉えて、学校を選択できると良いのではないかと。現状においても様々な選択肢があるのは福山市の素晴らしいところであり、その選択肢がより広がると良い。
- ・希望する部活動がない、義務教育学校等を希望するなどの理由で、指定校以外の学校を選択するこどもが増え、小規模化が加速している学校・地域もある。南部地域にはこんな学校がある、北部地域にはこんな学校があるというように、福山市全体を考えて学校を配置できたら良いのではないかと。思う。
- ・福山市は、様々な校種、特色のある学校をバランスよく整備するなど、新しいことにチャレンジしてきた自治体だと思う。義務教育学校は全国的なトレンドだが、財政面などを理由に整備を断念する自治体もある。義務教育学校の整備をベースに、地域性を考慮した学校整備など、今後福山市がめざすべき学校配置の在り方について方向性を示すことが、本委員会に問われていることである。
- ・地域としては、再編後の学校跡地の利活用も気になる。全国の廃校となった学校施設の利活用事例を提示してほしい。

■教員の人材確保等について

- ・義務教育学校に適した人材の確保が必要となり、着任後の研修など、教員の負担も増えるのではないかと。
- ・教員の人材確保は、本委員会での議論内容に関わらず取り組まなければならない福山市の重要課

第2回検討委員会の概要

題である。サポート体制の構築と研修が急務である。例えば、義務教育学校化を見据えて、研修により中（小）学校教員が小（中）学校教員の免許を取得できるなど、教員が安心して働くことができる環境を整えたうえで、教員としてレベルアップしていく仕組みを同時に考えていく必要がある。教員を養成する大学での取組とともに、着任校でのサポートやケア、レベルアップのための研修制度が必要と考える。

- ・PTAに加入したくないという保護者の声も聴く。保護者や地域にも、学校、教員への理解やサポートを求めていく必要があるのではないかと思う。
- ・コミュニティ・スクールをスタートさせ、委員として参画しているが、教員の努力を、地域がどのようにサポートしていくかを考えながら話し合っている。
- ・自分には関係ないと思っている人たちにも、前向きに関わってもらえるような学校運営の在り方を期待したい。

■学校施設の在り方について

- ・学校再編後も少子化によりさらに児童生徒は減少する見込みであり、空き教室も増えてくると思う。市役所の他部署とも連携し、他の公共施設の機能を入れるなどの複合化整備ができればいいと思う。福山市の公共施設の再配置計画があれば示してほしい。
- ・学校施設の在り方を検討する上で、佐々木委員のお話を聴きたい。

Ⅱ まとめ

- ・今後の学校再編の在り方について、義務教育学校の成果と課題等が理解できたことから、条件を整えば義務教育学校を整備していく方向性で検討していく。義務教育学校のメリットを補強するため、アンケート結果のデータや教員の声などをもとに議論を進める。
- ・そのために、義務教育学校についての情報発信や良い取組の普及、教員間の研修、人材育成などにも取り組んでいく。
- ・市全体で、多様な選択肢、地域性や地域バランスを考慮した学校整備、学校配置を検討する。
- ・市の他の公共施設との複合化整備等についても検討していく。
- ・コミュニティ・スクールなどを活用し、地域・家庭が学校運営を支えていけるようにしていく。

以上

諮問事項についての協議

1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

100NEN教育アンケート分析結果

□アンケートの対象	授業を行う教員
□アンケートの採用回	年度2回実施のうち、2回目の結果
□カテゴリ	①こども主体の学びづくり （17項目） ②教職員の元気と笑顔 （12項目）
□分析	小中（99校）と義務教育学校（2校）の比較（3年間分） 「よくあてはまる・あてはまる・どちらかというにあてはまる（肯定的意見）」を 選択した人の合計と 「どちらかというにあてはまらない・あてはまらない・まったくあてはまらない（否定的意見）」を 選択した人の合計の割合を比較

■小中と比較して、義務教育学校の方が「肯定的意見の割合が特に高い」項目

	(%)	義務	小中	義務-小中
① こども主体の学びづくり				
地域の人や課題などに児童生徒が直接触れる機会を持っている		88.2	63.3	+24.9
② 教職員の元気と笑顔				
学区の人や課題などに自分が直接触れる機会を持っている		79.8	49.4	+30.4
【参考】児童生徒への調査（2年間分） 全国学力・学習状況調査より抜粋 【調査対象者】小学5年生及び中学2年生				
地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか	前期 ▶	80.0	78.5	+1.5
	後期 ▶	76.4	67.7	+8.7

義務教育学校と小中を比較すると、「**①こども主体の学びづくり**」では、「**地域の人や課題などに児童生徒が直接触れる機会を持っている**」について、義務教育学校の方が小中よりも約25%高くなっている。「**②教職員の元気と笑顔**」では、「**学区の人や課題などに自分が直接触れる機会を持っている**」について、義務教育学校の方が小中よりも約30%高くなっている。また、「**児童生徒への調査**」では、「**地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか**」について、前期後期ともに小・中学校よりも高く、特に後期課程においては約9%高くなっている。いずれも、地域との関わりについて特に高い数値となっており、各義務教育学校の独自教科である「**軀学**」や「**SOSEI学**」の影響と考えられる。

■教職員の負担感

	(%)	義務	小中	義務-小中
② 教職員の元気と笑顔				
今とても忙しいと感じており、新しいことに取り組む余裕がない		64.9	71.0	△6.1
仕事にやりがいを感じている		91.4	91.7	△0.3

義務教育学校と小中の間に大きな差は見られなかった。

諮問事項についての協議

1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

□アンケートの対象 福山市内の義務教育学校に勤務する校長及び教頭並びに在籍2年目以上の教職員（非常勤を除く。）／勤務経験のある教職員（対象者76人）

□アンケート集計期間 2025年（令和7年）5月23日（金）～同年5月29日（木）

□アンケート回答状況 鞆の浦学園 22人／35人中 回答率62.9%
想青学園 32人／41人中 回答率78.0%
合計 54人／76人中 回答率71.0%
※どちらにも勤務経験のある場合は、直近の勤務校に含む

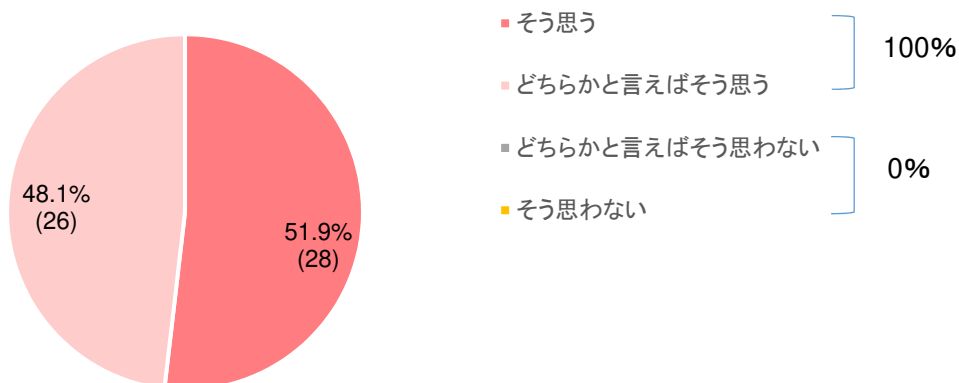
□参考（学校規模） ・鞆の浦学園（2019年度開校 児童生徒数197人）
・想青学園（2022年度開校 児童生徒数542人） ※2025/5/1現在

■義務教育学校の良さ

1.（教育内容の充実_小中一貫教育の推進）

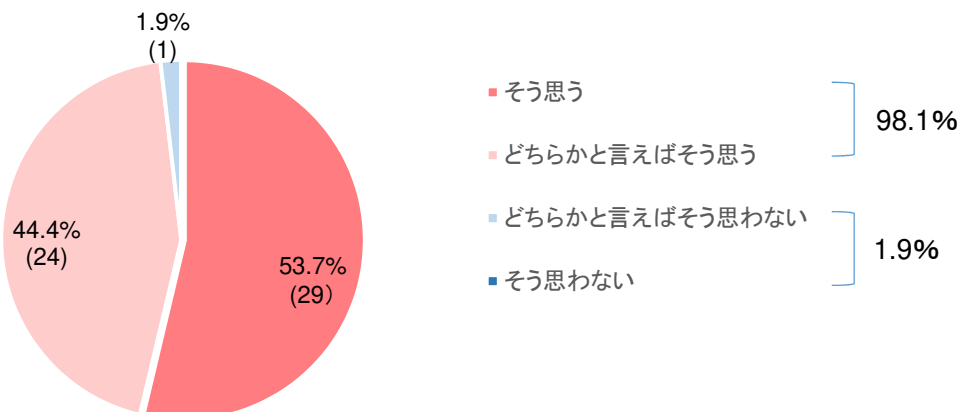
系統性や連続性を考慮したカリキュラムの編成や指導を行うことができる。

1年生からの英語学習、前期課程の教科担任制、後期課程のチーム・ティーチングなど、学校の実態に応じた取組ができる。



2.（教育内容の充実_柔軟なカリキュラムの編成）

学校独自の新教科（「覇学」「SOSEI学」）を創設でき、小中の枠を超えた探究学習や教科横断的な単元など、9年間の学びをつなぐカリキュラムが編成できる。



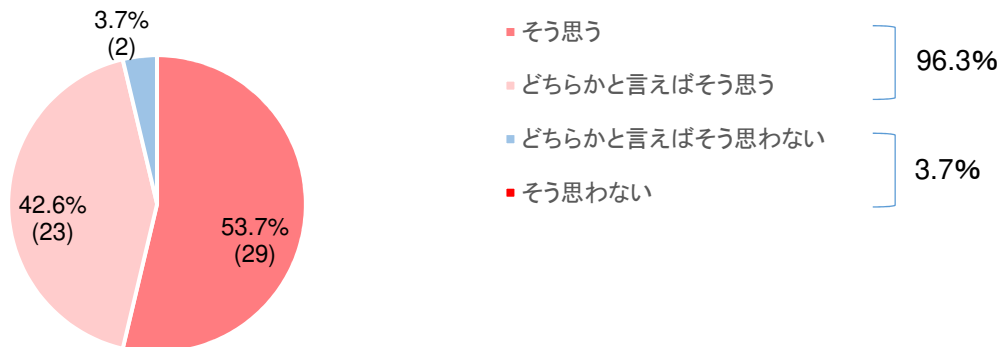
1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の良さ

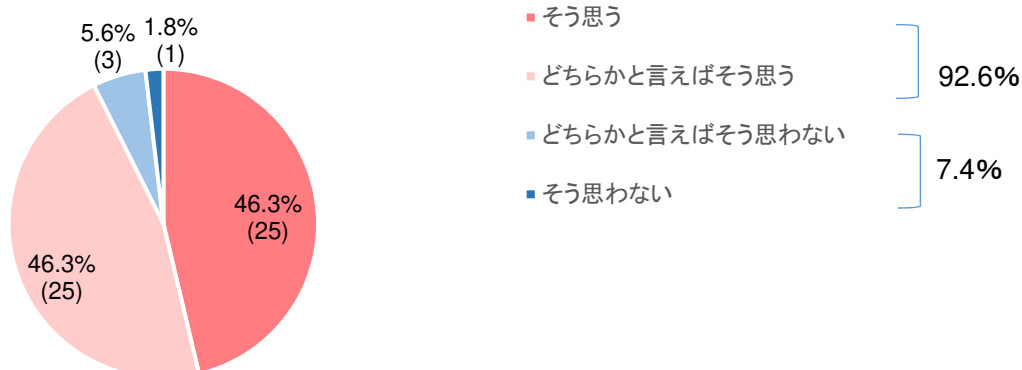
3. (教育内容の充実_個に応じた指導・支援)

一つの教職員組織のもと、緊密に授業や児童生徒に係る情報共有をすることで、個に応じた指導・支援を継続的に行うことができる。



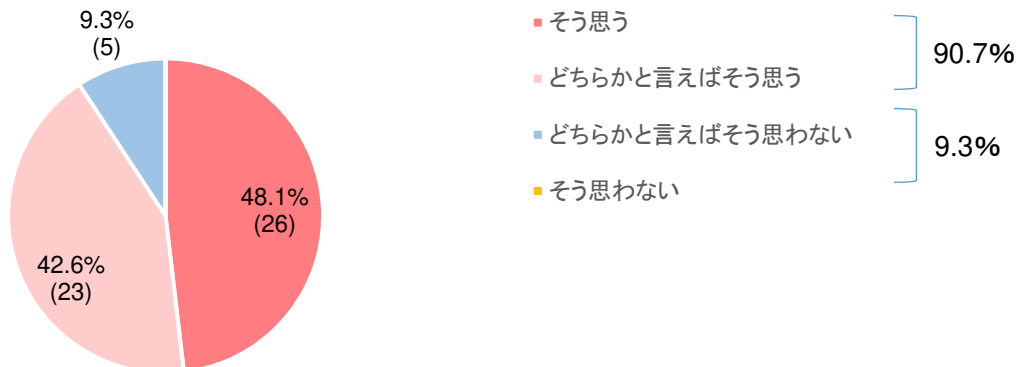
4. (児童生徒_日常的な異学年交流)

異学年交流により、上級生は下級生の手本になろうとする意識や優しさが育ち、下級生は上級生に対して憧れを抱くなど、相互により効果が生まれる。



5. (児童生徒_中1ギャップの緩和)

学習内容や指導方法等を前期・後期課程の教職員が共有することで、前期課程から後期課程への接続を円滑にできる。



1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

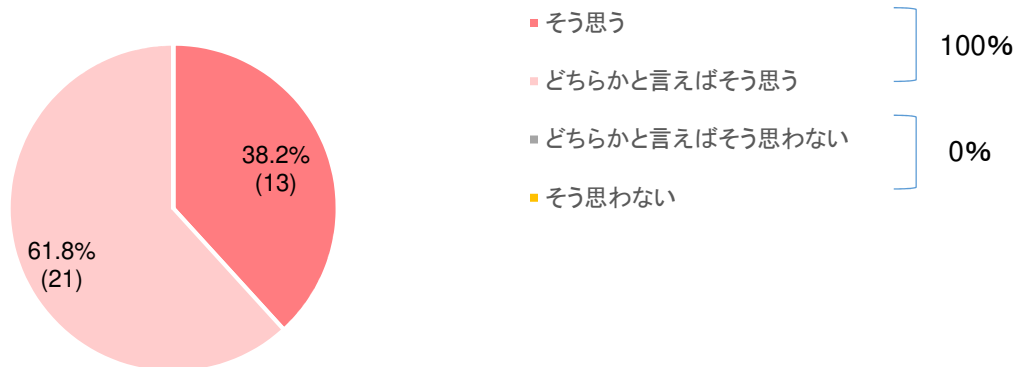
義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の良さ

6-1. (教職員_授業参観や研修を通した学び合い)

《前期課程の授業を担当している人》

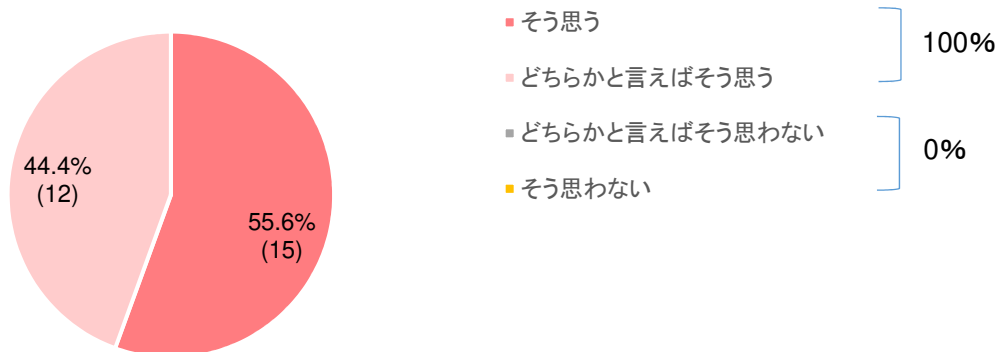
後期課程の専門性を活かした指導を取り入れることにより、前期課程での発展的な指導が充実する。



6-2. (教職員_授業参観や研修を通した学び合い)

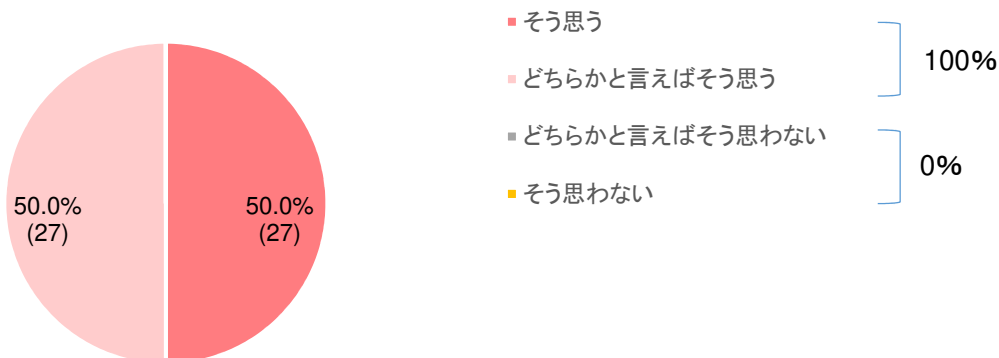
《後期課程の授業を担当している人》

前期課程の学習状況を知ることにより、後期課程での教科や単元のつながりを意識でき、指導が充実する。



7. (家庭_9年間を通した保護者との連携)

9年間の成長を見通しながら学校と家庭が連携し、児童生徒の実態を踏まえた取組を進めることができる。



1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の良さ

8. その他、義務教育学校の「良さ」について感じていることがあれば、具体的に記載してください。（記述）

【主な意見】

教職員体制

- ・異校種の教職員が共に働くことで、良さを認め、高まり合う教職員集団になっている。
- ・全ての先生が、1年生から9年生までの全ての児童生徒に、自分の学校の子どもたち」という意識で接することができることが素晴らしいと感じる。義務教育を終える9年生の姿に、全教職員が関わっているという実感は、他では味わえない。
- ・一人の校長のもと、ぶれることなく9年間の継続した取組が実現できると考える。
- ・前期の教員が後期の教員の進路実現に向けた責任、覚悟や成績管理・事務処理等を見ることで子どもたちに力を付けることへの意識を高めたり、後期の教員が前期の教員の丁寧で工夫された掲示物や子どもへの手厚い関わりを見ることで学習環境や傾聴の大切さに気付かされたりしていた。
- ・中学校の先生に授業を参観してもらい、アドバイスをいただいたり、教材研究を共に行ったりすることができる。小学校の先生と中学校の先生がいるので、様々な見方考え方ができて勉強になる。
- ・教頭が2人在籍することで、相談しながら、校務を円滑に推進できる。
- ・前期課程で後期課程の教員が専科を行うこと、後期過程に前期過程の教員が部活指導することで、働き方改革が進んでいる。

指導・支援

- ・義務教育9年間を見通した系統的な学び・指導を実践することができる。
- ・特に生徒指導では、前期課程の段階から人間関係を築くことができ、指導に深みをもたせることができた。
- ・学習面でも発達面でも、9年間の成長の見通しや過程を教員として学ぶことができる。
- ・9年間、子ども一人ひとりの特徴や背景などを知った上で関わるができる。
- ・9年間の児童生徒の姿や卒業後の姿を見ることができ、今の時点でここまで力を付ける必要があると明確に考えることができるようになった。保護者とも、先を見据えながら話ができている。
- ・あらゆる部分において、スムーズな連携ができるのは良さだと思う。

児童生徒の姿

- ・中1ギャップがほとんどなく、生徒も安心して生活できているように感じる。体育祭やその他の行事など前期後期で協力して行う行事も多く、後期の生徒は手本になろうと頑張っている。
- ・9学年が一つの学校で学び、一緒に取り組む姿はとても良い。9年生が小学生（低学年）と一緒に何かをしている風景は、義務教育学校ならではの風景だと感じる。
- ・9年生と1年生が遊んだり、放課後に8年生と2年生がサッカーをしていたりと、子どもたちが遊び合い、学び合い、助け合える環境が自然にできている。
- ・様々な行事を前期・後期合同で行うので、後期課程の子どもたちは通常の学校よりも多くの幅広い学年の児童生徒をまとめることになるため、良い経験を積むことができている。
- ・異学年交流をすることで、小学生は中学生の先輩の姿を見て憧れていた。
- ・後期課程のレベルの高い美術の作品や独自教科の発表などを前期課程が目にすることができ、ゴールイメージをもちやすくなる。
- ・学年を超えたつながりができやすい。
- ・後期課程の部活動に、前期課程の高学年から参加することで、活気と継続性が出ている。

地域との連携

- ・授業に係る地域連携が図りやすい。
- ・独自教科では、校区内の様々な地域に出向いた取組により、地域とのつながりを深めている。

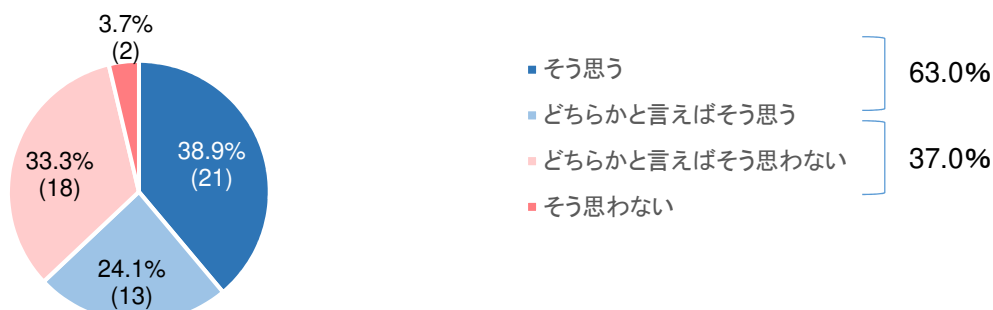
1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の難しさ

1-1. (児童生徒)

小学校から中学校への進学がなく環境が変わらないため、児童生徒が気持ちを切り替えることが難しい。



1-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

- ・制服や教科書、部活動などの環境が変化するため、切り替えはできている。
- ・6年生時には子どもたちの気持ちを後期へ持っていくように促すことが必要だが、制服や教科担任制などの環境が変わることで切り替えることができている子が多いようだ。
- ・制服が変わることは生徒にとって大きなステータスだと本人たちが言っていたので、4月の7年生には意識的に後期生になったという自覚を持てるような声かけをしている。
- ・前期後期で分けるのではなく、前期、中期、後期と段階を区切り、部活への参加、委員会の責任など、中期から中学校の内容を徐々に取り入れていくようにした。
- ・前期の先生からの声かけを日常的に行う。
- ・6年生を担任したときには、授業等での学習の仕方の違いや、後期で頑張りたいことを明確にして進級するよう、繰り返し声をかけた。常に後期課程のことを伝えていた。
- ・勉強の仕方を丁寧に確認する。
- ・卒業後の目標や自分の姿を考えさせ、進路についての取組をしていく。
- ・小学校(前期)の延長の意識でいる生徒が多いため、中学校は高校進学に向けての進路のこともあるため、学習面、生活態度などの話を生徒に話すようにしている。
- ・後期課程のルールを意識して活動するように学年や授業を通して話をする。
- ・後期課程の難しさや頑張った方がいいことを生徒の声をもとに前期課程に伝えるようにしている。
- ・「自立&自律」ということをより丁寧に指導することを心がけ、保護者にも最初の懇談でそのことを願う。
- ・7年生の段階から進路を意識させることで、前期課程からの意識のステップアップを図っている。
- ・前期と後期では変わってくるという話を授業で行なっている。
- ・中学校の3年間は社会へ出る準備期間であること、今後の進路は自分で切り拓かなければならないことを節目ごとに伝えている。

1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

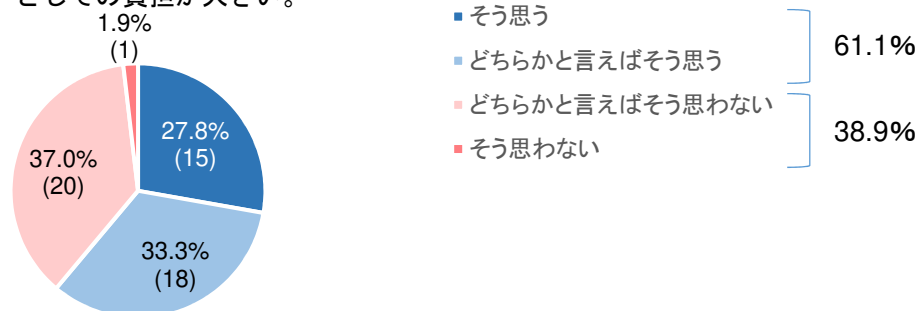
義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の難しさ

2-1. (児童生徒)

6年生に、前期課程最高学年としてのリーダーシップを育てにくい。

または、9年生のリーダーとしての負担が大きい。



2-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

6年生のリーダーシップの育成

- ・ 6年生に向けて最高学年だという話をしている。
- ・ 6年生のリーダーを育てるため、意図的な取組を行う。
- ・ 前期課程の活動で、リーダーとして活躍させている。
- ・ 1年生の手伝いなどは6年生がすることで上級生の自覚をもたせる。また、プール掃除は6年生が主体となって動いている。
- ・ 6年生が独自で1年生とのレクレーションを仕組むなどして、リーダーとしての自覚をもたせるための取組をしている。
- ・ 生徒会に6年生も参加して、全校の前に出る経験を積んでいる。
- ・ 一部行事で6年生をリーダーとして動く場面を設定している。

9年生のリーダーとしての負担

- ・ 9年生の負担が大きくなるということはない。
- ・ 行事の準備等を9年だけでなく、6年生にもさせている。
- ・ リーダーを多めに配置することにより、役割分担をして一人へ負担が重ならないようにしている。
- ・ 教員がサポートする。
- ・ 委員会には5年生から入っており、9年生には人を動かすこともリーダーの仕事だと伝えている。

学年によらないリーダー性の育成

- ・ 学年にこだわらずリーダーになれる学年や個がリーダーになる風土を作っている。
- ・ 学年を「1年～4年」「5年～7年」「8年・9年」の3部に分けて、それぞれの区切りを明確化することで、こどもたちが気持ちの切り替えを意識できるように教員がファシリテートすることが大切だと考えている。そうすれば、4年と7年生をリーダーとして育てることができる。また、児童会・生徒会にあたる組織の会長・副会長をはじめとする執行部や委員会の委員長などは、7年生までで組織して、8年生・9年生は、見守ったり、最低限の助言をする程度で、頼れる先輩として憧れの対象になればよいと考えている。

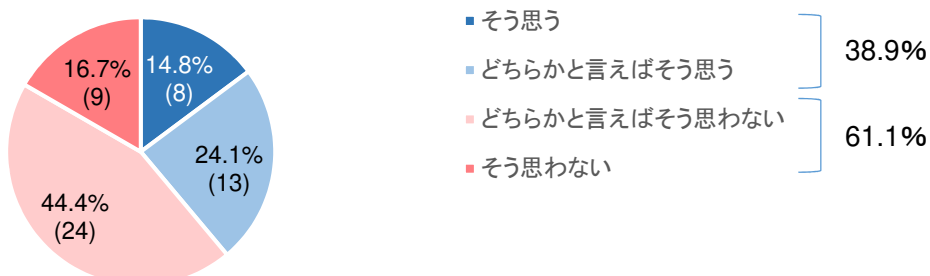
1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の難しさ

3-1. (行事)

全校行事、前期・後期別行事など、学校行事の持ち方、内容の検討が難しい。



3-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

- ・誰でもできる、かつ楽しめるものを考える。例：スポーツ大会でパラスポーツを取り入れることで、誰もが参加でき、楽しめるようにしている。
- ・1年生と9年生が一緒に参加する際、言葉の言い回しや内容を精選している。
- ・必要な行事かどうかを吟味して、精選している。
- ・前期・後期のそれぞれの先生に確認しながら検討している。
- ・学習発表会は、後期課程の行事との兼ね合いや気候を踏まえ検討している。
- ・前期課程を意識した活動を行うようにしている。
- ・職員室において、前期課程の教員との会話を大切にしている。

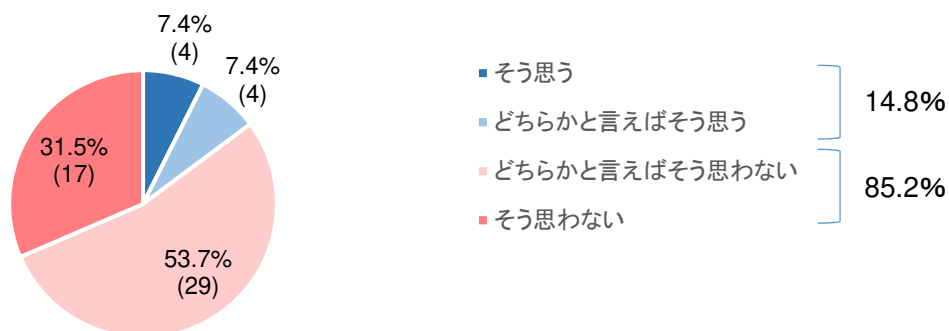
1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の難しさ

4-1. (教職員)

前期課程と後期課程の教職員には小・中学校の文化の違いがあり、お互いを理解し合うことが難しい。



4-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

- ・転勤してきたばかりの最初の職員会議で、文化の違いを職務の中に入れないよう校長先生が説明されている。(創設当初から)
- ・理解し合おうと思いながらの日々だが、根底にあるものまでの理解にはまだ至っていないと感じる。小学校と中学校の文化の違い(生徒指導、教科指導)が大きいため、義務教育学校に突然に入ると慣れるのにも時間がかかり、難しさを感じることは多々ある。慣れてきたころに異動という現実もある。
- ・お互いの不満を聞くこともあるが、話を聞いて調整するよう努力している。

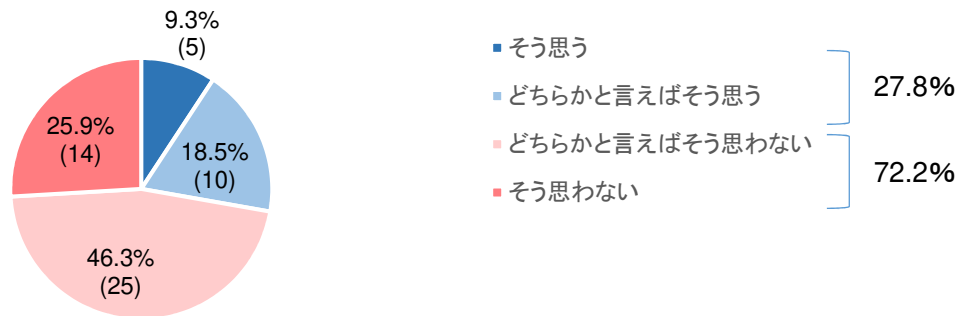
1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の難しさ

5-1. (施設)

授業で、体育館や特別教室を使用する際の調整が難しい。



5-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

- ・ 時間割表に見える化をし、円滑に調整できるようにしている。
- ・ 担当者が、よく練ったカレンダーを作成している。
- ・ 特別教室予約用のスプレッドシートを活用している。
- ・ コミュニケーションを取って話し合い、互いに譲り合いをする。

1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の難しさ

6. その他、義務教育学校の「難しさ」について感じていることがあれば、具体的に記載してください。
(記述)

【主な意見】

指導における難しさ

- ・前期後期で指導の統一が難しい。
- ・小学校の先生が中学校でどのように教科指導したらよいか難しい。
- ・発達段階の違う集団をどの方向に伸ばすのか、意識統一が必要だと感じる。中学生がもう一段階成長するために後期課程での意識改革をどのようにすればよいのが難しい。
- ・様々な場面で「難しい」と感じる場合、教職員の相互理解と見方や考え方を少し変えるだけで新たな方向性が見つかることが多かった。柔軟な考え方でこども達を育てることが大切だと実感している。
- ・こどもの発達段階を考えると小学校・中学校のやりかたというのがあるのは仕方ないと思う。それを考えながらの調整が難しい。
- ・規律ある雰囲気づくりが前期課程と後期課程で差がある。教員的意思共有が必要だと考える。

児童生徒の姿から感じる難しさ

- ・中だるみをする児童生徒が多くいる。
- ・人間関係が崩れると立て直すきっかけがなかなかない。
- ・長く一緒にいるので、保護者も子どもたちも気持ちの切り替えが難しい。
- ・少人数の義務教育学校は、部活動が持続可能ではない。

合同授業・行事等の難しさ

- ・中学生だけであれば簡単に集めて話ができることも、小学生と一緒にいる場合は時程の調整や話す内容をいつもより丁寧に考える必要がある。
- ・前期・後期一緒にやろうとしても実際難しいと感じることがある。
- ・1年生と9年生で体力差がかなりあり、やる事が限定されることもある。
- ・授業の間の休憩が後期課程に合わせているため、大休憩や昼休憩が短く、十分外で遊ぶ時間が少ない。
- ・担当ではないが、時間割の調整に時間がかかっているように思う。
- ・前期と後期どちらとも立場や気持ちがわかるだけに、どちらにも納得してもらえるように考えて提案をしなければならず、創設以来毎年、ほぼ全ての提案内容を改善したり考え直す作業を繰り返している。これでいけそうだなということが増えてきているが、ここに至るまでに、かなりの労力を要した。
- ・学校行事など様々な活動を通じて異学年の交流や学年の縦割り活動などを行っているが、1年生のような低学年と9年生の学年では発達段階に差があるため、様々な配慮が必要となる。

その他

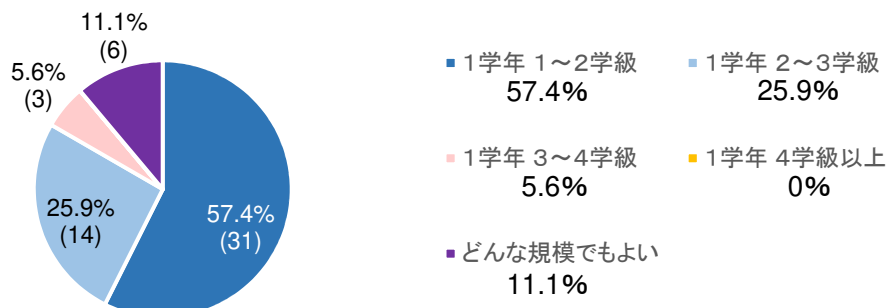
- ・特に難しさを感じることはない。
- ・児童生徒数に応じた人員体制が必要である。

1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の規模

1. 望ましいと考える義務教育学校の規模について、選択してください。（一つのみ）



2. 学校規模について、上記のように考える理由（記述）

【主な意見】

1 学年 1～2 学級

- ・大規模になればなるほど、児童生徒の実態に合った前期課程と後期課程共通の取組を立案・実施することが大変である。
- ・クラス数が多すぎると、リーダー学年が下級生をまとめることが大変になる。
- ・前期高学年が一番育つときに、前期・後期合わせると人数が多いことで、学年に応じた活動や委員会等がやりにくい。活動の場が少なくなり、意欲の減少につながってしまう。
- ・学級が多いと児童生徒との関係が結びにくいと思う。今は、関わりのない学年の生徒でも声をかけることができ、関係をつくることができることもある。
- ・学級数が少ないほうが、異学年での交流が増え、義務教育学校ならではの良さを育むことができる。
- ・児童生徒一人一人に目が届きやすく、教員との関わりも密になる。
- ・少人数の方が9年間の成長をしっかりと見通しながら、児童生徒の実態を踏まえた取組を進めることができる。
- ・こどもたちの人間関係のことを考えると、クラス替えができるくらいの規模がいいと思う。

1 学年 2～3 学級

- ・1学級のみだと9年間環境が変わらないため、2学級程度の小規模校が適当である。個をしっかりと見ることができ、クラス替えで環境も変えられ、児童生徒も切り替えができると思う。
- ・単学級の場合、クラス替えがなく、人間関係の調整や行事に難しさが出るため、2学級以上はあった方がよい。
- ・過去の経験から単学級の学年があると、担任の負担が大きくなる。学年の業務だけでなく単学級イコール学校全体の職員数が少なくなる。
- ・学年間での連携が取りやすい。
- ・規模が大きくなりすぎると、全体的な把握が難しくなり、個々の活躍の場面も制限されてくる。
- ・これ以上だと人数が多すぎて、行事等をするにあたって時間や内容の検討が難しい。

1 学年 3～4 学級

- ・クラス編制における生徒等のバランスを考えると、3学級以上が望ましい。
- ・児童生徒数が多いと教職員の人数も増えるため、仕事を分担して行える。
- ・生徒・保護者ともに人間関係が難しい場合、1～2学級だとどうにもならないことがある。それが9年間続くのはなかなか厳しいものがあると思う。

どんな規模でもよい

- ・運動場や特別教室など、規模に応じて環境が整っていればよいと思う。
- ・人員やシステムなどが整っていれば、どんな規模でも対応できる。

1 これまでの取組を踏まえた今後の学校再編の在り方

義務教育学校教職員アンケート結果

■義務教育学校の規模

3. 学校全体の児童生徒数はどのくらいが望ましいか、ご意見があればお願いします。

(例) 1, 000人を超える規模は大きすぎる など

【主な意見】

- ・ 200～300人
- ・ 全校児童・生徒で500人くらいが最大だと思う。
- ・ 500～600人程度
- ・ 700人くらいまで
- ・ 800人を超えると規模は大きすぎる。
- ・ 前期・後期合わせて800人くらいで、一クラス30人程度であれば全員をしっかりと見ることができると思う。
- ・ 学級数が3と考えて、各学年100人程度、全校900人程度が望ましい。
- ・ 1学年1学級だと一つの家族のような雰囲気、まとまりを感じた。
- ・ 1学年2学級以上はあった方が良くと思う。
- ・ 3学級編制できる程度の人数が望ましいのではないかな。